
where is your heart?

広洲海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

where is your heart?

【Nコード】

N6714P

【作者名】

広洲海人

【あらすじ】

多くの人が心弾ませるクリスマス・イヴ。

けれど、待つ者と待たせる者の心中は穏やかでない。

肩を並べることはできなくても、きつと心は君の隣に。

“彼女”が眺める聖夜の一幕。

遠くに賑やかな音楽と楽しげなざわめきが聞こえてくる。今日はクリスマス・イヴ。家族は暖かい食卓を囲み、恋人たちは手をつなぎ合って光輝く街へと歩き出す。そんな中、一人小さな児童公園でほんの少しだけ欠けた月を見上げてため息をつく影がある。遊具もなく、小さなベンチが一つあるだけのまっ平らな公園だ。真っ白な息が風にちぎれて消えて行く。

若い女性がこんな時間に一人で暗い公園にいるなど危険極まりない。それでも彼女は待ちたかった。

いつもの場所で、いつものように、いつもの彼を。

さつき街を抜けてきた時、耳にした会話を思い出してみる。大した意味はない。そうすることで、孤独と疎外感が薄れるような気がしていた。

『キッドも大変よね。わざわざイヴに予告状出さなくても。』

『聖夜に翻る白いマント・・・ああん、カッコよすぎるわあ〜。キッド様あ〜。』

呆れたように、でもどこかさみしそうに笑う髪の毛の長い女の子と、世の若い女性の例に漏れず目をハートマークにして天下の大泥棒の名前を叫ぶ茶髪の女の子。

『園子には真さんがいるでしょ。全く、浮気者なんだから・・・。』

『それはそれ。これはこれ。蘭こそ新一君へのプレゼント、しっか

り準備してるんでしょ。』

『ん・・・一応ね。帰ってくるか分かんないし・・・。』

『まーったく、こんなに一途な女の子をほっというてどこに行ってるんだかね、あの男は!』

(あの子も、待ってるんだ。)

思わず声を掛けそうになった自分を必死で止めた。声を掛けたところでこの雑沓、聞こえるはずはない。

彼がここを覚えている保証も確信もない。今年もダメだったらもう諦めようと思っていた。

彼女は自分の姿を見下ろした。真っ白なコートに、少しヒールのあるブーツ。タータンチェックのマフラー。

その下にひっそりと輝いているのは、天使を象ったシルバーアクセサリー。

彼女の年から考えると随分と地味な格好かもしれないが、子供の頃から洒落っ気がない、色気もないと言われ続けてきた彼女にとってみれば最大限の努力だった。

もう一度、街中での会話を思い起こす。

『キッドのバカ!どうしてわざわざ今日予告状出すのよ!』

『パーティーがダメになったのは残念だけど、こっやってイルミネーション楽しめてるし、いいんじゃない?私は キッド見たいし。』

『恵子!あいつは諸悪の根源!お父さんは家でゆっくりできないし、快斗は見物行っちゃうし!』

『なんでそこに黒羽君がでてくるのかな?』

『だって、クリスマスに快斗がいなくてつまんないじゃない!』

『あ、そ・・・。』

自分の気持ちを正直に自覚していない、正義感の強そうな女の子と、そんなからかい甲斐のない彼女に呆れて苦笑いしているメガネの女の子。

（幸せだよ、好きな人が側にいるって。）

いつも彼は自分の先を歩いていた。恋人だけでも、憧れで、一番遠い存在だった。

一生分の勇気をかき集めて告白にOKの返事をした。まさか自分が彼の恋人になるなんて思ってもみなかった。他にも可愛い女の子はたくさんいる。彼ならより取り見取りだったはずだ。今でも自信はない。

（怪盗キッドにも好きな人っているのかな。）

妙なことを考えた自分に彼女は苦笑した。

（キッドの彼女って大変だろうな。彼、女性にも警察にも大人気なもの。）

彼女は派手な泥棒であるキッドが嫌いではなかった。もちろん、彼に向って大っぴらに声援を送る訳ではない。彼の所業は犯罪には違いないけれども、どこか心が軽くなって元気づけてくれるような何かがあった。

公園の入り口の方で物音がした。はっとして顔を上げる。待っている人ではなかったけれど、驚くような人物が目に入った。

白いマントを翻し、街頭の上に危なげなく立っているその人は間違いない怪盗キッドだった。

大胆不敵と称される彼にしては憂いに満ちた表情をしていた。彼を追いかけるように、小さな足音が公園内に響いた。見れば、息を切らせた小学生くらいの男の子が目をキラキラさせて走ってくる。彼女には、なぜだかキッドが微笑んだように見えた。

「おーい、名探偵。これ返しといてくれねーか。」
まるでキャッチボールでもするかのような軽いノリでその右手から放たれたのは、時価数億円のビッグジュエル。少年は慌てて宝石に飛びつき、何とかそれを支えた。

「俺の仕事を増やすなっ。それに、なんだって“今日”なんだ！」
少年の目つきも口調も見た目とは不釣り合いだ。彼女は興味を覚えず、奇妙な二人の会話に聞き入った。
もつとも、怒鳴り合う彼らの声は自然と耳に入ってきたが。

「オレだって予定あった。文句なら、“一夜限りの奇跡！”『星降る夜』の名で知られるヨーロッパの至宝来日！」なんて企画を立てた美術館に言ってくれ。」

「お前が予告状出さなきゃいい話だろ。」
「ビッグジュエル目の前にして手え出さねーなんて怪盗が廢る。」

キッドは街頭の上に腰掛けて、次々と銀鳩を空に放ちながら薄い笑みを浮かべた。

「そつちこそ、捕まえに来なきゃいい話だろ。」
呆れたように怪盗の言葉を聞いていた少年の眉がつりあがる。
屈んでスニーカーに手を伸ばしたかと思うと、そこから激しい放電が始まった。

「てめー、今すぐそつから叩き落とされてーか！」
「遠慮しまーす。」

彼女の我慢は限界だった。派手な笑い声が漏れ、公園中に響き渡る。

（二人とも、殺気立ってるのにすごい面白い。なんなんだろ……）

少年の振り上げた右足は空中で止まり、怪盗は跳躍準備の姿勢で固まる。

二人とも目を泳がせ、顔を見合わせる。

「誰かそこにいるの？」

さっきとは打って変わってかわいらしい声を出す少年に、彼女の笑いは収まらない。

目を白黒させて突っ立っている二人と、笑い続ける彼女の上に白いものが落ちてきた。

綿のように軽い、雪。

彼女が笑うのを止めて、再び静まり返った公園は何とも言えない神聖な雰囲気包まれた。

冷たい雪が、彼女の頬で溶けていく。まるで、涙のように流れて行く。

その時、彼女は大きくて暖かいものを背中に感じた。

（来てくれた……）

彼女がずっと待っていた彼。じわじわと安堵が広がっていく。

未だに固まっている二人を振りかえると彼女はにっこり笑った。

（女の子をあんまり待たせちゃダメだよ。怪盗さんに、探偵さん。）

二人は耳を押さえてじつと木のベンチを見つめていた。

人っ子一人いないはずの暗い公園。探偵はつかつかとベンチに歩み寄った。表情は分からない。

「・・・帰らねーか？」

速攻で却下されると思った怪盗の提案は、案外あっさりと受け入れられた。

「今夜は見逃してやるよ。」

やれやれとばかりに腰を浮かしかけた怪盗は続く探偵の言葉に度肝を抜かれた。

内容そのものではなく、その手の言葉が探偵の口から出ることが予想外だった。

探偵は、非科学的なもの、証明できないものを一切信じないはずだ。しかし、彼は何のためらいもなく口にした。

「魂の忠告に免じてな。」

彼の手に鈍く光っていたのは土に汚れた銀色の天使。

怪訝な顔をする怪盗に探偵は目を伏せた。

「まだ・・・暖かいんだ。」

冷え切った指に、仄かな暖かさを確かに感じる。

それに、と彼は続けた。

「お前も聞いたんだろ？忠告を。」

ゆっくりと、不敵な笑みを浮かべて怪盗は頷いた。

二人が愛する彼女たちの元に帰ったのは、それから幾らもしない頃。白い雪と白い息が舞う中で聖夜は刻々と更けて行く。

今宵、あなたの心はどこにありますか。

(後書き)

前から書きたいと思っていたクリスマスネタです。

かなりわかりにくい小説になってしまいましたが、ネタとしては結構気に入っています。

文章力が上がったら書きなおそうかとも考えています。

連載のほうは滞り気味ですが、決して止まってはいいないので(笑)
そちらの方もよろしく願います。

それでは皆さん、良い夢を……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6714p/>

where is your heart?

2010年12月31日04時54分発行